

40th
Kenichiro Kobayashi

ブダペスト国際指揮者コンクール優勝から40年――

小林研一郎、ハンガリーとの強い絆

指揮者デビュー40周年を迎えた小林研一郎。彼が指揮者になるチャンス射止めたハンガリーの地で、デビュー40周年を記念する全8回のコンサート・シリーズが行われた。その中から、長く音楽監督を務めたハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団との8年ぶりの共演の模様とともに、ハンガリーから帰国したばかりの小林のインタビューもお届けする。

REPORT

ブダペスト国際指揮者コンクール優勝 40周年記念コンサート

取材・文 中東生
Text: Shinobu Naka
Photo: Gabo Feyer

小林研一郎とハンガリー国立フィルが紡ぎ出す「点と線の音楽」

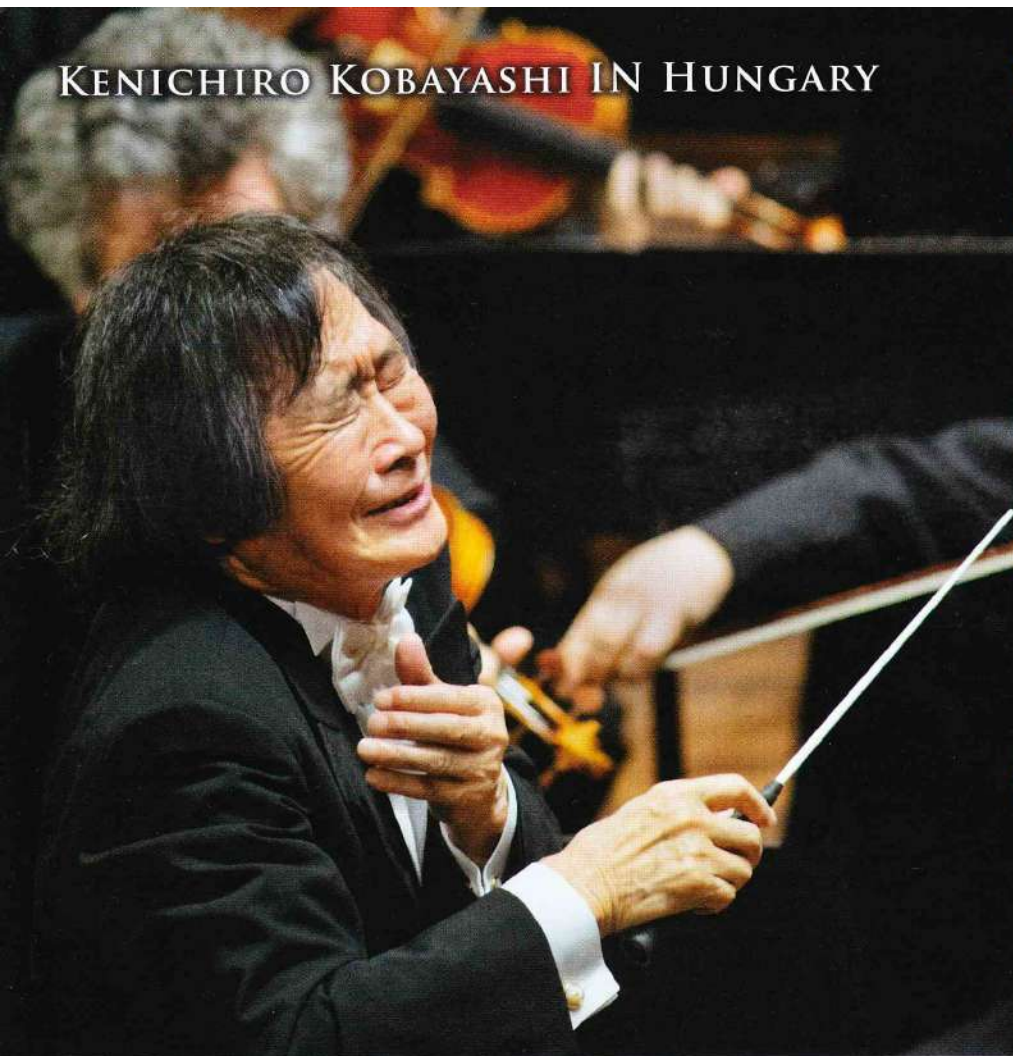
その昔、ハンガリー音楽界の檜舞台として世界中の音楽家たちを招き入れてきたリスト音楽院大ホールは、3年の年月をかけた改装が終わり、昨年10月に柿落としをしたばかりだ。ブダペスト西駅から歩いて15分ほどの場所にあり、すぐ側にはレストラン街などがある歩行者天国の広場もあり、ブダペスト市民のお勧めエリアだ。大通りを隔てると、マラーが住んでいた建物があり、入口には石碑が掲げられている。

正面玄関からすぐに広がる、歴史の重さを感じさせる装飾がそのままに残され

たロビーに入ると、小林研一郎の昔の映像が流れているスクリーンが設置されていた。それを懐かしそうに眺める人々が印象的だった。ハンガリーの聴衆にとって小林の40年間はそのまま彼らの青春と重なるのであろう。3月14日、タイトル通り、マラー「交響曲第2番〈復活〉」で、小林とハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団の音楽が「復活」したのである。

舞台上に所狭しと座っているオーケストラ、途中から登場する案を固辞し冒頭からスタンバイして小林を感心させた合唱団、そして聴衆が一体となって、懐かしそうな笑顔を満面に溢れさせて、舞台に表れたマエストロをハンガリー特有のリズミカルな拍手で歓迎した。

KENICHIRO KOBAYASHI IN HUNGARY



【左】情感豊かに指揮を振る小林研一郎。【右】会場となったリスト音楽院大ホール

公演後、達成感にあふれた表情をうかべるマエストロ



カーテンコールにて

「ベートーヴェンは苦悩を歓喜に変えたが、マーラーは苦悩として描き切っている。その苦悩が天空に昇って行って、そしてまた地獄に堕ちて行って……という濃密な時間をオケと合唱と聴衆と共有したかった」と、選曲理由をインタヴューで語ってくれた通り、小林が待ちきれないようにタクトを振り下ろすと「濃密な

時間と空間」が展開された。

最大限に劇的で運命的な曲想と、懐かしさを感じさせる優しい表現を巧みに駆使しながら、それぞれのテンポを神業のような自由さで変化させていく。三連符などでもオケは一糸乱れず指揮棒に操られ、マエストロのわずかな表情の変化や、拳を上げるなどのボディランゲージにも敏感に呼应する。合唱も豊かな響きで、フレーズを長く持続させて歌うところなどは涙を誘う美しさだ。ソプラノのサボキ・トウンデの、厚いオケも合唱も突き抜ける声と、ガル・エリカの深いアルトが色を与え、小林の言う「心と心が通じ合った」音楽を、全員の集中力で実現させた。

小林にハンガリー国立フィルの特徴を尋ねると「普段あまり聴けない、点と線の音楽」だという。「心と心が触れ合った『点』が、音楽という一本の『線』の上で長く発展していく演奏」を意味するそうだ。「現在約70%が当時から団員のみなで、新しく入ってきた30、40人の人たちと融和させるのに丸2日要しました」と3日目のプロローブで初めて小林は昔の音を取り戻せたという手応えを得たようだったが、コンサート当日は、その「線」が聴衆と共に40年の時空を越えて「面」ともなつて広がり、会場中を包み込んだ。「全員がマーラーの中に浸っていた」と小林が終演後に話してくれたように、最後の音たちはもはや小林の棒を離れ、天に昇っていくようだった。小林が音楽監督を勇退して以来10年ぶりの共演を、全員が抜群の集中力をもって堪能し、聴衆も長い間拍手で応え続けていた。これほどの《復活》はもう聴けないであろう。